

12-10 第190回地震予知連絡会重点検討課題

「東北地方太平洋沖地震に関する検討」概要

Summary of the intensive discussion subject for “the 2011 Off the Pacific coast of Tohoku Earthquake in Japan” .

地震予知連絡会事務局

Secretariat for the Coordinating Committee for Earthquake Prediction

平成23年4月26日、第190回地震予知連絡会を東北地方太平洋沖地震を受けた臨時会として開催した。

通常の会議は、地殻活動モニタリングの検討と重点検討課題の議論の2部構成で行っているが、本会議は重点検討課題の1部構成とした。

「東北地方太平洋沖地震に関する検討」をメインテーマとして、5つのサブテーマ（1）本震の滑り分布について、（2）前兆について、（3）M9になった理由について、（4）余震と誘発地震について、（5）余効変動について、に関する議論が行われた。

- （1）各機関から地震時の滑り分布モデルが報告されたが、いずれのモデルも最大25～35メートル程度が推定された。また、最大隆起量は6～8メートル程度に達している。
- （2）3月9日の前震後に地震活動が本震の破壊開始点に近づいていたことが報告された。1997～2000年に比べ2007～2010年の方が震源付近のプレート間の結合が小さくなっていることが報告された。
- （3）M9の地震を引き起こすメカニズムを説明した4つのモデルが紹介された。
- （4）本震後に東日本で内陸地震活動が活発化した地域が報告された。
茨城県北部・福島県東部の地震活動について、4月11日のM7の地震前に周辺域の地震活動の静穏化が認められることが示された。
- （5）GEONETによる余効変動の観測では、岩手県沿岸部では沈降傾向が継続している一方、牡鹿半島周辺・銚子周辺では隆起傾向が示された。